18

金色（こんじき）のちひさき鳥のかたちして
銀杏（いてふ）ちるなり夕日の岡に

歌意

晩秋の夕暮れ、辺り一面を茜色に染めて、岡の向こうに夕日が沈もうとしています。いちょうの葉がまるで金色に輝く小さな鳥のような姿で、ひらりひらりと翻りながら落ちていきます。

掲出歌集　『恋衣』明治38（1905）年1月
初　　出　「明星」明治38年1月号（晶子27歳）

・所 在 地　大阪府立金岡高等学校（北区金岡町 2651）
　　南海高野線初芝駅北へ徒歩 15 分
・建　　立　平成 15 年 2 月 21 日（創立記念日）
　　第 27 期卒業生寄贈
・書　　中山園子（芸術科教諭）
・連 絡 先　大阪府立金岡高等学校　072-257-1431

大阪府立金岡高校は創立30周年を記念して晶子の歌碑を建立することになったが、「金」「岡」の二字が詠み込まれていることもあって、この歌は当校にこそ相応しいと選歌された。特にこの二字は刻字が金色に彩色されている。歌碑の傍らには銀杏の苗木も植樹された。

晶子の歌碑の前を、生徒たちが小鳥のように軽やかに登下校するのを見遣りながら歌碑建立に尽力された先生方は、生徒を見守る晶子の歌碑が卒業生の誇りになればと話されていた。

また近代文学研究家の木股知史氏はこの歌について「晶子の歌は、心のかたちをとらえることを大切にしている。銀杏の葉を金色の小さな鳥のかたちと見たとき、作者はささやかな心の新生を体験しているのだ」（与謝野晶子倶楽部機関誌第6号）と解説している

※この歌は、愛知県岡崎市の甲山中学校にも歌碑となっている。